

堺屋太一著「日本を創った12人—石田梅岩—」PHP文庫 PHP 研究所 2006年2月17日刊を読む

勤勉に働くことは人生修行—石田梅岩—

1. 享保 14(1729)年、45 歳の時、京都の車屋町にはじめて塾を開いた。といっても、最初から受講生がいたわけではない。まずは自分の思っていることを通りに向かって演説するのである。今日であれば街頭演説のようなものだ。最初の日、大根を片手に持った農家の人だけがただ一人聴いていただけだった、という。
一時、竹下登さんが「われ辻立ちしてでもこの道を説かん」といったが、この言葉のもとには石田梅岩である。つまり街頭演説してでも自分はこの道を教えたい。こういう意欲に満ちていたわけだ。それから 15 年間、梅岩の辻立ち遊説活動がつづく。
2. では一体、石田梅岩が説いたのは何であったか。まさに勤勉に働くこと、儉約して清貧に生きること。そして勤勉と儉約の二つを両立させるにはどうすべきか、という問題への解答だった。単に勤勉だけでなく、同時に儉約を説き、その両立を目指す倫理を発表したところが重要である。
3. その根源は、彼が独自に考えた「諸業即修行」に集約できる。勤勉に働くことは人生修行だ、というのである。「諸業」つまり農民なら農耕、商人なら商い、職人なら物づくり、何でもいからその生業に勤勉に携わっていると、自らの人格が修行される。したがって、そのためには生産性を無視してもよいのではないか、というのだ。梅岩の言葉を集約したものとして、よくいわれるのは、「人、三刻働きて三石の米を得る。われ、四刻働きて三石と一升を得。なんとすばらしき」
4. 他人が日に 6 時間働いて三石の米を収穫した、自分は毎日 8 時間働いて三石と一升の米を穫った、これはすばらしい喜びであるという意味だ。ここでの「働き」は、生産に関心が置かれているのではなく、人格修行、人としてのあり方を示したものと解すべきであろう。
5. 労働生産性という概念を持ち出せば、最後の一刻については著しく下がっている、毎日、三刻(6 時間)働いて年に三石の米を得られるとすると、一刻で一石である。ところが、自分は四刻(8 時間)働いて三石一升だから、最後の一刻の限界労働生産性は、前に比べて百分の一に下がっている。けれども、ゼロではない。ここがミソである。
6. 「富士講」ははじめから生産額ゼロと分かっている富士登山を薦めたが、こちらはゼロではない。ひよっとしたら、この一刻が大豊作につながるのかも知れないし、これで凶作が避けられるかも知れない。だから、遊んでいるよりはましである。その上さらに人格修行となれば、これほどすばらしいことはないではないか。

P224 ~ P225

[コメント]

日本の独自性は、いつ、誰が、いかにして創ったのか。その一人が京都で活躍した江戸時代の町人、岩田梅岩。日本経済のご意見番、堺屋太一先生の解説を本書で読んだら「都鄙問答」も是非。御一読を。

— 2014年2月18日 林 明夫記 —